

アルゼンチン（亜国）

「ときめき日本語レベルテスト」作成，実施報告

日本語能力試験 4 級に達しない学習者を対象にして

豊田 真規*

森 由卯子**

キーワード：5 級 学習時間 100 時間， 6 級 学習時間 50 時間

要 旨

アルゼンチンでは国際交流基金主催の「日本語能力試験」が 1988 年より実施され、多くの学習者が受験している。しかしながら学習レベルが「日本語能力試験」4 級に達しない学習者も多い。在亜日本語教育連合会附属日本語教育センターでは、これらの学習者に対し、学習段階に応じてその力を確かめることと、励ますことを目的に「ときめき日本語レベルテスト」を作成、実施している。本稿ではテスト作成背景、作成手順、テスト概略、受験者傾向、2005 年度実施テストの結果と分析を報告する。

「ときめき日本語レベルテスト」には 5 級と 6 級（各級の問題は、文字・語彙、聴解、文法・読解）が設置されており、いずれも 13 歳程度以上の成人向けである。5 級は日本語学習 100 時間程度、6 級は日本語学習 50 時間程度の学習者を対象としている。テストは出題基準と過去問題のデータベースを資料に作成されているが、出題基準はアルゼンチンで広く利用されている教科書 6 冊を基礎としている。問題作成は出題基準の改正から始まり、約半年かけて行われる。結果はレベル認定と、素点、得点率が学習者及び各申込校に各種問題別に全体平均得点率と共に送付される。

2005 年度における受験者数は 5 級が 166 人、6 級が 246 人であった。テスト結果の傾向を見る資料としてレベル認定率、基本統計量、相関係数と 係数、総得点と人数のヒストグラムを示した。また、項目分析資料として正答率と弁別指数を算出した。正答率が一定の数値以外の項目及び正答率が一定の数値以内でかつ弁別力が一定の数値以下の項目は今後の検討の対象となるべきもので、このような分析はこれからの問題作成上の参考になると思われる。最後に「ときめき日本語レベルテスト」がより広く普及、実施されるための課題が提案される。

*TOYOTA Maki：鳥取大学大学院教育学研究科大学院生

**MORI Yuko：在亜日本語教育連合会附属日本語教育センター講師

1. はじめに

在亜日本語教育連合会附属日本語教育センター（以下教連日本語教育センター）では、「ときめき日本語レベルテスト」を作成，アルゼンチンとその周辺国を対象に毎年10月に実施している．アルゼンチンでは，国際交流基金主催の「日本語能力試験」が1988年度より実施され多くの学習者が受験しているが，学習レベルが4級に達しない学習者も多い．「ときめき日本語レベルテスト」はそれらの学習者に対し，学習段階に応じてその力を確かめると，励ますことを目的に開発された．本稿ではテスト作成背景，概要と内容，作成手順，受験者傾向，テスト結果の分析，課題について報告する．

2. 背景 「日本語力^{ちから}だめし大会」からの発展 発足の経緯

「ときめき日本語レベルテスト」の前身となったのは JICA シニア日本語専門家¹ 連絡協議会（1993年度）での構想を元に1994年に実施された「日本語力だめし大会」というテストである．この「日本語力だめし大会」はアルゼンチンで1988年から実施されていた日本語能力試験1級～4級の受験準備，および「4級に到達しない者に対し学習段階に応じて，その力を確かめると，励ますこと（中山1996）を大きな狙いとしていた．このテストは準1級から準4級と5，6，7級の全7級があり，1994年度には1,149名の日本語学習者が受験している．これは，在亜日本語教育連合会加盟の全国の日本語学校の生徒ほとんどが受験した数である．これは JICA シニア日本語専門家の助言のもとに，亜国日本語教育研究会²の教師たちが問題作成を分担し協力してテストを作り上げていったことに深く関係していると思われる．5，6，7級の試験内容は5級が文字（漢字）と語彙，文法，6級が文字（カタカナと基礎漢字）と語彙，文法，7級が文字（ひらがな）と語彙で，いずれも聴解問題はなかった．

1998年度に5，6，7級共通の聴解テストが試作，実施された．1999年度より聴解テストが5級，6級，7級各級ごとの内容で作成，実施され，また各級について「日本語力だめし5～7級出題基準」，「日本語力だめし5～7級参考語彙リスト」，「カタカナ語彙の基準化案」が設けられた．

2001年度にはそれまで各日本語学校が分担していた問題作成を，一括して教連日本語教育センターが担当することになった．またこの年には5級から7級において，内容の変更が実施された．それまでの，日本国内での小学校国語テストに類似した内容から，日本語を外国語として捉えた内容への変更であった．

実施級について，2001年度のテスト終了後のアンケートによると，回答学校数15校のうち8

¹ 在亜日本語教育連合会に派遣されていた国際協力事業団（JICA；現・国際協力機構）シニア日本語専門家

² アルゼンチンで活動する日本語教師で構成されている教師会

校が今まで通り1級から7級の実施を望み，5校が5級以下のテストのみを希望していたという結果がある．その一方，このテストの受験者には成人と年少者が混在しており，年少者受験者には上級の問題の語彙が難しく，また，成人学習者にとっては5，6，7級の語彙が子供向き過ぎるという傾向があった．これらの諸事情と，テスト一括作成体制の導入などにより2002年度からは作成級が5，6級のみへと変更，受験対象者も日本語を母語としない成人学習者（13才以上）とされた．同時に名称も「アルゼンチン日本語レベルテスト」へと変更された．

2004年度には，名称が「ときめき日本語レベルテスト」に変更される．これは試験対象区域をアルゼンチンと隣国ウルグアイにとどめず，中南米大陸全体に広げようとの意識を背景にしてのことであった．2004年度にはドミニカ共和国が参加し，2005年度に至っている．

3. 「ときめき日本語レベルテスト」概要

3-1. 目 的

国際交流基金主催「日本語能力試験」4級レベルに達しない学習者が受験によって自分の学習の成果を確かめ，新たな目標設定の手助けをすることを目的としている．また，将来「日本語能力試験」を受験するときのために，試験方式に慣れることも目的の一つとなっている．

3-2. 対 象

日本語を母語としない13歳程度以上（中学生程度以上）の学習者を対象にしている．5級は日本語学習時間100時間程度，6級は学習時間50時間程度の学習者が対象である．（亜国では週に一度1.5～2時間の学習クラスが多い．そのような形態に合わせ，おおよその学習時間が新学期開始の3月からレベルテスト実施月の10月までで50時間になることを設定している．）

3-3. 出 題 基 準

3-3-1. 出題基準作成の目的

「出題基準」はテスト作成者のため，及び教師が学習者に対して受験指導をする際の参考にできるように作成された．尚，試験問題の約90％は原則として出題基準から出題されるが，10％は問題作成関係者の判断によってほぼ同水準である文型，文字，語彙からも出題され，その旨受験者にも通知されている．

また，この出題基準は毎年見直されその年の6月（テスト実施日は毎年10月）までに各日本語学校に通知，個人受験者に対しては在亜日本語教育連合会のホームページ³に掲載している．

3-3-2. 調査資料

亜国内の日本語教育の現状を踏まえ、国内において広く使用されている教科書『みんなの日本語初級Ⅰ』⁴、『新日本語の基礎Ⅰ』⁵、『日本語初歩』⁶、『JAPANESE FOR YOUNG PEOPLE Ⅰ』⁷、『にほんご45じかん』⁸、『TOTAL JAPANESE Conversation Ⅰ』⁹を基礎資料として作成した。また、『日本語能力試験出題基準』(国際交流基金・国際教育協会)¹⁰の4級の文字・語彙・文型事項も参考にした。

3-3-3. 出題基準構成

文法 文法事項(文型, 活用等)

5級 28文型

6級 14文型

助詞・指示語・疑問詞等

5級 疑問詞(14), 指示語(9), 助詞(28), 接尾語(1), 副詞(2), 接続詞(3)

6級 疑問詞(10), 指示語(9), 助詞(18), 接続詞(1)

文字 5級 ひらがな, カタカナ, 漢字(55字)

6級 ひらがな, カタカナ

語彙 5級 516語(ひらがなで表記される名詞 185, カタカナで表記される名詞 65, い形容詞 46, な形容詞 15, 動詞Ⅰグループ 48, Ⅱグループ 19, Ⅲグループ 7, 数詞 24, 副詞 15, 接頭辞 1, 接尾辞 13, 時を表すことば 53, あいさつ, 応答表現, 感動詞 26)

6級 270語(ひらがなで表記される名詞 85, カタカナで表記される名詞 55, い形容詞 24, な形容詞 6, 動詞Ⅰグループ 16, Ⅱグループ 4, Ⅲグループ 6, 数詞 14, 副詞 6, 接頭辞 1, 接尾辞 10, 時を表すことば 29, あいさつ, 応答表現, 感動詞 20)

カタカナで表記される名詞には南米の学習者のために南米でよく知られている食べ物の名前や国名(ブラジル, チリなど)も含まれている。

³ 在亜日本語教育連合会(略称:教連)ホームページ <http://www.kyoren.com.ar>

⁴ スリーエーネットワーク編(1998)『みんなの日本語初級Ⅰ』スリーエーネットワーク

⁵ 海外技術者研修協会編(1990)『新日本語の基礎Ⅰ』スリーエーネットワーク

⁶ 国際交流基金(1988)『日本語初歩』凡人社

⁷ 国際日本語普及協会著(1998)『JAPANESE FOR YOUNG PEOPLE』講談社インターナショナル

⁸ 沢村, 下田著(1998)『にほんご45じかん』専門教育出版

⁹ 早稲田大学国際教育センター編(1994)『TOTAL JAPANESE Conversation Ⅰ』凡人社

¹⁰ 国際交流基金, 財団法人日本国際教育協会著作・編集『日本語能力試験出題基準』凡人社

表1 各級試験の試験時間と配点，問題数

級	試験の種類	時間	配点	問題数
5級	筆記試験（文字・語彙）	25分	26点（文字15・語彙11）	26問（文字15・語彙11）
	聴解試験	27分	24点	12問
	筆記試験（文法・読解）	40分	50点（文法38・読解12）	26問（文法20・読解6）
	計	92分	100点	64問
6級	筆記試験（文字・語彙）	20分	30点（文字15・語彙15）	25問（文字15・語彙10）
	聴解試験	20分	20点	10問
	筆記試験（文法・読解）	35分	50点（文法40・読解10）	24問（文法20・読解4）
	計	75分	100点	59問

3-4. 「ときめき日本語レベルテスト」の構成

「ときめき日本語レベルテスト」の構成は表1のとおりである。

3-5. 認定基準と結果通知

受験者には得点と到達レベルが知らされる。レベルは100点を20点ごとに分け、AからEの5レベルのどれに該当したかが通知される。Aは素点100点から80点で初級日本語（5級 約100時間，6級 約50時間）の文法，語彙を十分習得し簡単な会話や短い文章がよく理解できるレベルである。Bは素点79点から60点で初級日本語（5級 約100時間，6級 約50時間）の文法，語彙をほぼ習得し簡単な会話や短い文章がほぼ理解できるレベルである。Cは素点59点から40点で初級日本語（5級 約100時間，6級 約50時間）の文法，語彙をいくつか習得しごく短い会話や短文のみ理解できるレベルである。DとEは初級日本語（5級 約100時間，6級 約50時間）の文法，語彙を基礎からもう一度学習する必要があるレベルで，Dは素点39点から20点，Eは素点19点から0点に位置した該当者を対象としている。

また，個人通知表には，得点と到達レベルの他に受験者数，全体の各レベルの認定率，個人の文字，語彙，聴解，文法，読解別の得点率および平均得点率などが通知され，当人のレベルが全体のどの位置付けにあるのかが一目でわかるようになっている。

一方，学校単位の申込みの場合各校にその学校の受験者平均点が通知され，それを全国平均と比較することで各種類（文字，語彙，聴解，文法，読解）の今後の指導資料として活用できるようになっている。

表2 「ときめき日本語レベルテスト」内容

	5 級		6 級	
文字	問題Ⅰ	(5問) ひらがな, カタカナの正しい表記を選ぶ問題	問題Ⅰ	(15問) ひらがな, カタカナの正しい表記を選ぶ問題
	問題Ⅱ	(5問) 漢字の読みを選ぶ問題		
	問題Ⅲ	(5問) 正しい漢字表記を選ぶ問題		
語彙	問題Ⅳ	(11問) 文中の下線部分にあてはまる正しい語彙を選ぶ問題	問題Ⅱ	(10問) 文中の下線部分にあてはまる正しい語彙を選ぶ問題
聴解	問題Ⅰ	(8問) イラストを見ながら, 音声テキスト, 質問を聞き, 該当する選択肢をイラストの中から選ぶ問題.	問題Ⅰ	(7問) イラストを見ながら音声テキスト, 質問を聞き該当する選択肢をイラストの中から選ぶ問題.
	問題Ⅱ	(4問) イラストはなく, 音声テキスト, 質問を聞き, 該当する選択肢を選ぶ問題.	問題Ⅱ	(3問) イラストはなく, 音声テキスト, 質問を聞き, 該当する選択肢を選ぶ問題.
文法	問題Ⅰ	(10問) 単文中の空所に助詞を入れる問題	問題Ⅰ	(7問) 単文中の空所に助詞を入れる問題
	問題Ⅱ	(6問) 単文中の空所に, 疑問詞, 活用語の適当な活用形を入れる問題	問題Ⅱ	(8問) 単文中の空所に, 疑問詞, 活用語の適当な活用形を入れる問題
	問題Ⅲ	(4問) 対話文中での適切な言い方を選ぶ問題	問題Ⅲ	(5問) 適切な応答を選択する問題
読解	問題Ⅳ	(2問) 50字程度の文章, 会話を読んで同じ意味を表す文を選ぶ問題	問題Ⅳ	(4問) 150字程度の文章を読んで後の問題に答える問題
	問題Ⅴ	(4問) 200字程度の文章を読んで後の問題に答える問題		

4. 「ときめき日本語レベルテスト」の内容とその特徴

問題の構成と内容は「日本語能力試験」4級を参考にして作成されている。将来の受験を仮定し、その問題形式に慣れるためである。内容は表2の通りである。

4.1. 文字・語彙テスト

各問題には、日本語とスペイン語の指示文をつけ、解答例が設けられている。5級、6級の問題Ⅰ(図1)は絵が指す語彙の正しい表記を4択から選ぶ問題である。文の意味がわからなくても語彙が選択できるように、また選択する語彙の思い違いがないように絵も付してある。挿入絵に関しては、自作の絵、市販イラスト集シリーズのCD-ROM¹¹、インターネットのクリップアー

¹¹ 株式会社MPCのHybrid CDROMイラスト集シリーズ(著作物使用管理係に使用申請が必要か確認済み)。

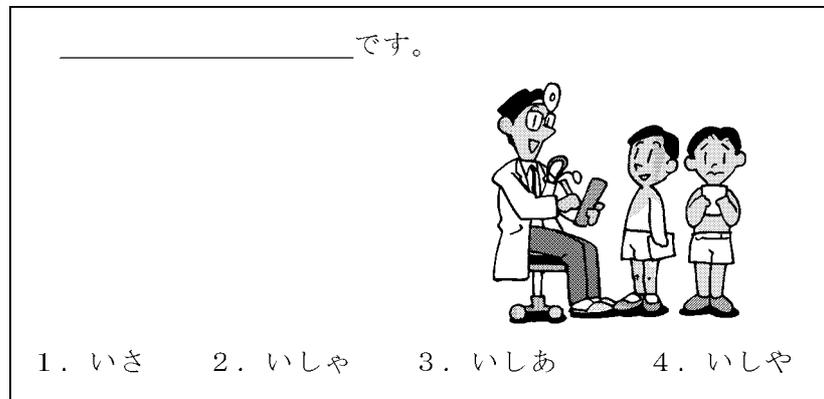


図1 例 6級文字テスト 問題I

トから選んだ。

問題Iでは，字形の似ている文字の違いを認識する問題や長音，撥音，促音の正しい表記を問う問題が主である．また，問題Iの特徴として，スペイン語母語話者の起こしやすい誤用を考慮して作成したものを何題か加えている．例えばスペイン語の音にはない音 [z], [ts], [dz] の表記に関する問題やスペイン語とヘボン式ローマ字の違いによる誤用の問題などである．

5級の文字テスト問題II，III，語彙テストの例は次のとおりである．

例 5級文字 問題II 二月八日です．（1. ようか 2. よっか 3. はちび 4. はちか）

5級文字 問題III わたしは がくせいです．（1. 先生 2. 生先 3. 学先 4. 学生）

5級語彙 _____と かいものを しました．

（1. きんようび 2. でんしゃ 3. ちち 4. みせ）

4-2. 聴解テスト

問題I，IIにそれぞれ一題例を設けている．2005年度のテストより音声テキストと質問は2度繰り返し流すことにした．

例 5級聴解 問題II（問題I省略）

女の人が駅で切符を買っています．全部でいくらですか．

女：大人一枚，子供一枚ください．

男：はい，大人が一人6ペソ，子供が5ペソですから，全部で11ペソです．

（1. 16ペソです 2. 5ペソです 3. 6ペソです 4. 11ペソです）

4-3. 文法・読解テスト

単文や読解問題は，南米の学習者のために固有名詞は南米に親しみのあるものを用い，読解問

題の内容も、南米にいる状況を踏まえた場面にしたものが登場する。5級の文法テストの問題Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、読解テスト問題Ⅳの例は次のとおりである。

例 5級文法 問題Ⅰ バス()のります。 (1.に 2.が 3.と 4.で)

5級文法 問題Ⅱ このじしょを_____も いいですか。

(1.つかいて 2.つかて 3.つかって 4.つかんで)

5級文法 問題Ⅲ A:にちようび なにを しましたか。

B:_____。

1.なにも しませんでした 2.なにを しました

3.はい,そうじを しません 4.いいえ,なにも しませんでした

5級読解 問題Ⅳ (問題Ⅴ省略)

ルイスさんは げつようびに えいごのテストが あります。

きょうは うちで べんきょうします。

テストがおわってから ともだちと えいがを みます。

1.ルイスさんは きょう うちに います。

2.ルイスさんは げつようび うちに います。

3.ルイスさんは テストのまえに えいがを みます。

4.ルイスさんは きょう えいがを みます。

4.4. 解答方式

「日本語能力試験」と同様マークシート方式である。これは、「日本語能力試験」4級受験のために学習者がこの解答方式に慣れることを目的としているからである。

5. テスト作成手順と結果計算について

5-1. 作成会議

「2005年度ときめき日本語レベルテスト」作成は2005年1月の出題基準見直しを皮きりに2月より本格的に開始された。完成までの打ち合わせ会議は以下のように行われた。

2月 第2週 問題収集開始 出題基準変更確認

第4週 作成担当振り分け(3名)

3月 第4週 各自担当部分完成

4月 第1週~第4週 問題すり合せ訂正箇所決定

5月 第2週 図,イラスト挿入

第3週 表記,内容チェック

（教連日本語教育センター内での確認）

第4週 表記，内容チェック

（外部へ委託して確認）

6月 第1週～第3週 聴解テスト録音

7月 聴解テスト編集

8月 聴解テスト編集

9月 テスト問題コピー，テープダビング

5-2. テスト後のアンケート

内容はⅠ筆記テスト（文字・語彙・文法・読解），Ⅱ聴解テストについて，それぞれ出題内容，問題量，時間などについて Ⅲその他（受験対象者，級の設定，開催時期など）についてきている．それらを検討し次年度に役立てている．

5-3. 問題収集

2005年度よりテスト内容の土台となる基礎問題収集に「日本語教師養成講座」¹²講師陣の協力を請い，より現場に即した問題の収集に努めている．日頃学習者に接する中で感じる手応えをもとにした問題収集を講師陣に依頼することで，教連日本語教育センターでの問題傾向の偏りを是正でき問題の充実が図られた．協力要請時期は2005年2月であった．

5-4. データベース

2002年度から2005年度までの問題のデータベース化を行った．これは出題の偏り是正と安定化を促進するためである．出題基準の中からどのような語彙がどのような問題で出題されたか一目で把握できるので問題作成がよりスムーズにまた偏りなく行われる．

5-5. 聴解テープ編集

聴解テストにはカセットテープを用いているが，経済的に録音のための機材や場所の確保が難しく音声や音質に問題が多い．テスト後のアンケートにも声ははっきりしていない，音量が低いなどの意見が多く聞かれ今後の課題となっている．また，録音者には日本人と日系2世の日本語教師が担当しているが，アクセントやイントネーションなどに関しては録音時に何度も聞き直し正しいアクセントやイントネーションとなるよう努力している．

2004年度までの聴解テスト用テープは最初から最後までを出演者全員で一気に録音する方式

¹² 在亜日本語教育連合会付属日本語教育センターが主催している日本語教師養成講座

で作成されていた。2005年度は聴解問題の手順説明、問題指示文、会話を部分ごとに録音し編集する方式をとった。この編集方式は以下の4点で優れている。

- ① 録音作業を部分ごとに短く切り上げることができる。
- ② 少人数の中でやり直しが容易にできる。また練習がしやすい。
- ③ 繰り返し部分は編集作業で付け加えることができる。
- ④ 後日再度録音作業必要時はその部分の出演者のみ集合すればよい。

5-6. 結果計算について

計算ソフトを使って全受験者のテスト回答、結果を管理している。各設問に対する各回答をコンピュータ入力することによって自動的に計算が済み正確かつ迅速な結果が得られる。

6. 受験者について

6-1. 過去3年間の応募者数と受験者数

2003年度から2005年度までの応募者数、受験者数は表3の通りである。3年間を通じて受験者数は増加しており5級よりも6級の受験者数の方が多くなっている。また、目安としてアルゼンチンにおける「日本語能力試験」4級の受験者数を挙げると、2003年度は229人、2004年度は267人、2005年度は271人であった。

6-2. 2005年度年齢別受験者数

2005年度の年齢別受験者数は表4の通りである。5級、6級共に10代が一番多く、20代がそれに続いている。12歳以下の受験者があるのは、受験対象者が13歳程度以上でありその年に13歳となる学習者も積極的に参加しているからである。

表3 応募者数と受験者数(人)

	2003年度			2004年度			2005年度		
	5級	6級	合計	5級	6級	合計	5級	6級	合計
応募者数	162	225	387	173	237	410	176	267	443
受験者数	156	200	356	159	229	388	166	246	412

表4 2005年度年齢別受験者数(人)

	12歳以下		13~19歳		20~29歳		30~39歳		40~49歳		50歳以上		合計	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
5級	20	12.05%	65	39.16%	59	35.54%	14	8.43%	5	3.01%	3	1.81%	166	100%
6級	17	6.91%	99	40.24%	94	38.21%	24	9.76%	7	2.85%	5	2.03%	246	100%

7. 2005 年度「ときめき日本語レベルテスト」結果と分析

7-1. 試験結果

2005 年度テストのそれぞれの結果は表 5，表 6，図 2，図 3 の通りである。5 級，6 級とも文字

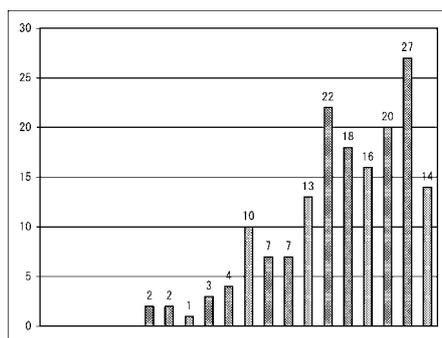
表 5 5 級基本統計量

	文 字	語 彙	聴 解	文 法	読 解	総 合
配 点	15	11	24	38	12	100
平 均 点	13.08	8.30	19.34	26.88	8.86	76.44
平均得点率	87.2%	75.4%	80.6%	70.7%	73.8%	76.44%
標準偏差	2.49	2.58	3.83	7.72	3.05	16.46
最 高 値	15	11	24	38	12	100
最 低 値	0	0	10	5.5	0	26.5

(文字・語彙の最低点零点に関してこの受験者は聴解からの受験で，文字・語彙テストを受けていない可能性が高いが，今回は受験者データのひとつに含まれている。)

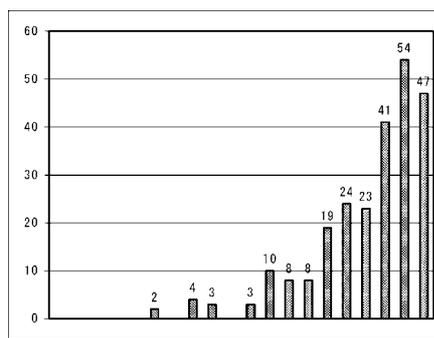
表 6 6 級基本統計量

	文 字	語 彙	聴 解	文 法	読 解	総 合
配 点	15	15	20	40	10	100
平 均 点	13.11	11.79	17.21	33.33	7.67	83.01
平均得点率	87.4%	78.6%	86.1%	83.3%	76.7%	83.1%
標準偏差	2.03	3.36	3.11	6.99	2.26	14.58
最 高 値	15	15	20	40	10	100
最 低 値	1	0	0	8	0	27.5



N=166 平均点 76.44
標準偏差 16.46
素点 100 点、5 点刻み

図 2 5 級総合点のヒストグラム



N=246 平均点 83.01
標準偏差 14.58
素点 100 点、5 点刻み

図 3 6 級総合点のヒストグラム

の得点率が最も高く、次に聴解が続いている。2004年度の文字・聴解得点と比較すると(5級文字 89.3%, 聴解 71.6%, 6級文字 88.0%, 聴解 68.0%), 文字の得点率が高いのは同じであるが、聴解の得点率は上がっている。これは、質問文が2度流されたことと、テープの音質、音量の改良に関係していると思われる。

7-2. レベル認定率

表7に見られるように、5級、6級ともレベルAが最も多く、6割以上得点したもの(レベルA+レベルB)は、5級で83.7%、6級で91.6%となっている。

7-3. 信頼性(係数)および類間の相関

表8、表9は2005年度「ときめき日本語レベルテスト」結果の係数による信頼性(括弧で表された数値)及びテスト類間の相関である。5級では信頼性は文法では0.8以上であったが、その他4類は0.8以下でその中でも聴解はもっとも低かった。一方、類間の相関については、文字とその他の4類の相関は中程度となっている。文字の得点率87.2%(表5参照)が特に高いこ

表7 5級と6級のレベル別人数との認定率

	5 級		6 級	
	人 数	認 定 率	人 数	認 定 率
レベルA(総得点100~80)	77人	46.4%	168人	68.3%
レベルB(総得点79~60)	62人	37.3%	57人	23.3%
レベルC(総得点59~40)	22人	13.3%	16人	6.5%
レベルD(総得点39~20)	5人	3.0%	5人	2.0%
レベルE(総得点19~0)	0人	0.0%	0人	0.0%
計	166人	100.0%	246人	100.0%

表8 2005年度5級の信頼性および類間の相関

	文字	語彙	聴解	文法	読解	総点
文字	(0.794)	0.561	0.483	0.467	0.532	0.669
語彙	0.561	(0.766)	0.576	0.734	0.608	0.832
聴解	0.483	0.576	(0.624)	0.665	0.569	0.813
文法	0.467	0.734	0.665	(0.803)	0.631	0.926
読解	0.532	0.608	0.569	0.631	(0.745)	0.789
総点	0.669	0.832	0.813	0.926	0.789	(0.909)

()内は 係数 N=166

表9 2005年度6級の信頼性および類間の相関

	文字	語彙	聴解	文法	読解	総点
文字	(0.708)	0.565	0.395	0.624	0.409	0.716
語彙	0.565	(0.751)	0.503	0.742	0.560	0.859
聴解	0.395	0.503	(0.603)	0.490	0.365	0.813
文法	0.624	0.742	0.665	(0.829)	0.606	0.936
読解	0.409	0.560	0.569	0.606	(0.353)	0.709
総点	0.716	0.859	0.813	0.936	0.709	(0.904)

() 内は 係数 N = 246

とを考え合わせると，その他の能力と関係なく受験者の多くが文字認識（ひらがな，カタカナ，基本漢字）ができていると考えられる．また，語彙と文法及び読解の相関は中程度の高めの数値となっている．

6級では信頼性は5級と同じく文法では0.8以上であったが，読解が非常に低かった．これは問題数が4問と少ないことが原因のひとつと考えられるが，さらに読解問題が純粋に読解力を測っていたのか（語彙，文法など他の力を測っている可能性が大きい設問ではなかったか），または読解の内でも異なる種類の能力を測っていたのか検討の必要があろう．2005年度の6級読解問題は4問のうち2問が文章中で問いに対応する部分を発見できれば答えられるもの，1問が文章中に語彙単位での答えはなく複数の情報から解答を導き出すもの，1問が全体把握の問題であった．これらの設問間の相互相関は他と比べて1問のみが低い結果となっている¹³．4問という問題数の少なさと設問間の相互相関の低さが信頼性係数の低さに関係していると考えられる．類間の相関については，聴解がその他の4類と低い相関及び中程度の相関となっている．強い相関がみられたのは語彙と文法であった．

7-4．正答率と弁別指数

項目分析として各設問の正答率と解答選択傾向を分析しているが，紙面の都合上これを省略し，ここでは正答率と弁別指数を使用して行った分析を報告する．池田（1978）では望ましい項目は正答率が20%から80%のものとなっているが，「ときめき日本語レベルテスト」では正答率90%以上のものが多数ある．それは6級テストが50時間程度の日本語学習者を対象とし，学習の到達度を見るという性格が強いからである．5級テストは100時間程度の日本語学習者を対象としているが，やはりその地点までの学習到達度を見ることを重点としつつ，「日本語能力試

¹³ 2005年度ときめき日本語レベルテスト6級読解問題4問間の相関を出したところ，設問1が他の3問に対し，0.039～0.053の値で非常に低かった．これは「他の3問に答えられても設問1に答えられるとは限らない」問題作りとなっていることを意味する．すなわち設問2，3，4に対し設問1は非常に低い相関性しかもたない性質の問いであったと言える．

験」4級への橋渡しも目的としている。テストで良い成績を修めることは学習者が日本語学習に対する新たな学習意欲を持つことに深く関係する要因の一つと考えられる。従って今回の分析では上記の条件をゆるめ、望ましい項目の基準を正答率が90%以下とした。成績上位取得者と下位取得者の正答率の差をみる弁別指数は0.4以上が妥当とされる(池田1978)が、正答率が90%近くあるとその数値は出てきにくい。ここでは設問として容易すぎて意味のないものを省くことを分析の目標としており、0.25以上を妥当として項目を検討した。弁別指数は、石田(1992)に倣い上位成績グループ27%と下位成績グループ27%のその項目における正答率の差を算出した。分析を行った結果、正答率90%以上かつ弁別指数0.25以下の項目数と正答率89%以下でも弁別指数0.25以下の項目数は表10のように現れた。

5級では文字I、聴解Iに正答率が90%以上で弁別指数が0.25以下の項目が複数ある。すなわち、その項目は上位成績取得者と下位成績取得者との差をあらわさない設問で、皆がおしなべて正答したというものである。聴解は音声テキストと質問文を2度流す形式に改められたことが全体の正答率をあげ、弁別指数を小さくしたことに関係していると思われる。弁別指数がゼロに近いものやマイナスになるものは項目を差し換えるなどの必要がある(海保1985)ためこれらの項目の再検討が必要だ。

また、その項目の正答率が成績の上位下位に無関係に低かった時も弁別指数は小さくなる。表10の5級文法のB、4問はこれにあたり、例は「こうえんをさんぼします」の助詞を選択肢(が、を、と、や)の中から選ぶ問題(正答率84% 弁別指数0.18)、「きょうはシャワーをあびないでください」の動詞の活用形を選択肢(あぶない、あびない、あばない、あびるない)の中から選ぶ問題(正答率61% 弁別指数0.16)などである。このような場合、テスト作成側は現場の状況を確認把握した上でその項目が難しすぎるのかどうかを判断する必要がある。

6級では語彙以外に正答率90%以上、弁別指数0.25以下の項目が複数ある。聴解テストに関

表10 正答率と弁別指数 一定基準外の設問個数

	5 級			6 級		
	A	B	全問題数	A	B	全問題数
文字	6	3	15	9	1	15
語彙	1	0	11	0	0	10
聴解	5	0	12	4	1	10
文法	0	4	20	4	2	20
読解	0	0	6	1	0	4
合計	12	7	64	18	4	59

A 正答率90%以上かつ弁別指数0.25以下の項目数

B 正答率89%以下で、弁別指数0.25以下の項目数

しては5級と同じくテスト実施方法の変更が結果に関係していると思われる。表10の6級文字のA, 9問が文字テスト全問題数15問の過半数となることから, 文字テストにはほとんどの受験者がおしなべて正解できるような易しい項目が多すぎるのではないかと、また、内容が一定水準以下の項目の出題を再検討したほうがよいのではないかとと言える。一方語彙問題には条件に該当する項目が無いことから適当な問題作成だったといえることができる。

8. 今後の課題

8-1. レベルテストのストック

教連日本語教育センターではテストのストック化を目指している。その年にその年度のテストを作成していたのでは時間的にも精神的にも余裕がなく、テスト実施を含む諸活動をスムーズにこなすことに支障がでる。2005年から2006年にかけて集中してあらかじめ2年分のテストを作成することによりその後の日本語教育センターの活動に余裕ができると考えられる。

8-2. 聴解問題 CD 化

2005年度の聴解テストはカセットデッキで編集を行い時間がかかった上に音質に問題があった。特に声質と声量の個人間のちがいを録音機がうまく調整できないことで、試験時に聞き取りにくい箇所を残したままテープ編集を終了せざるを得なかった。次年度から日本語教育センターでは録音時にミキサーを使い(2006年2月に購入済み)声質、声量の調整をすることと、録音、編集をコンピュータ化することにより音質、音量ともに一定の水準に仕上がったテスト作成を予定している。

8-3. 問題収集

2005年度に引き続きテスト制作準備段階における各方面への協力要請を行う予定である。亜国日本語教師研究会を始め教連主催の日本語教師養成講座講師の先生方に積極的に問題作成に興味を持ってもらいたいと考えている。自分の担当する学習者を試験するとしたらどのような問題が適切かという具体的な課題を持つことによって、現場教師にとって日々の指導の到達目標が一層明確になるのではないかとと思われる。

8-4. レベル分けの仕方

現在のレベル分けは100点を20点ごとに区切り5段階(A~E)としている。しかしながらこれでは1つのレベルに19点~20点の差がある。レベルA, B取得者の割合が5級で83.7%, 6級で91.5%と60点以上に集中する事実を踏まえそれらを同じレベルと認定するか、より厳密な

分け方にするか検討する必要があると思われる。

8-5. ホームページの充実

現在、在亜日本語教育連合会のホームページに「ときめき日本語レベルテスト」専用ページはない。アルゼンチン国外をターゲットにテスト受験者募集を続けるにあたりテストについてインターネットでいつでも検索がかけられるように現在制作中¹⁴である。専用ページではテスト日程をはじめ、テストの構成、出題基準、申し込み方法等を記載する予定である。

参 考 文 献

- 中山昭三（1996）「日本語力だめし大会の実践とその考察」『移住研究』 33，国際協力事業団，83。
池田央（1978）『テストで能力がわかるか』，日本経済新聞社。
石田敏子（1992）『入門日本語テスト法』，大修館書店。
海保博之（1985）『心理・教育データの解析法 10 講』，福村出版。

¹⁴ www.kyoren.com.ar ときめき日本語レベルテスト